

日本語の視点類型に関する研究

— “意義性の俯瞰的把握” を中心に —

佟

—

認知言語学を含んだ広義の機能主義言語学は、言語現象の解釈、特に“WHY”についての解釈に長けているが、機能は普遍的な側面があるため、個別言語間の違いに関しては、普遍的な機能がどのように千差万別な言語事実を動機付けているのかという問題があり、伝統的な機能主義の方法論だけでは限界がある。

この弱点を補う研究分野の1つは視点研究である。従来の視点研究は広義の認知言語学の下位研究分野の1つとして、特に日本語と英語の対照を中心に盛んに行われてきたものであり、多くの成果を挙げてきた。中でとりわけ説得力が高く、広く運用されている理論の1つは主観性（主体性）のアプローチであるが、主観性（主体性）のアプローチは、①認知モードや主観性の違いがそのまま言語の違いに繋がるかという問題、②主観 vs. 客観の二元論の問題、などの理論上の問題を抱えている。故に、“主観”“客観”の概念を用いずに、視点における個別言語の傾向性について主観性（主体性）のアプローチに劣らない解釈力を持つ理論的枠組が必要であることが分かる。

これを踏まえて、本研究は、“意義性の俯瞰的把握”という視点類型を提出し、中国語と英語と関連しながら、日本語における多くの個別性のある言語現象の成立の動機づけを統一的に解釈し、日本語の全体的な視点類型を特徴づけることを目的とする。

本研究の構成は以下の通りである。

第1章では、本研究の問題提起と構成を説明する。

第2章では、視点・視点類型の概念を説明し、日本語の視点類型に関する主な既存の研究を紹介し、その問題点を指摘する。特に重要なのは、主観性（主体性）のアプローチの紹介である。また、本研究で参考とする他の重要な理論や概念も兼ねて説明する。

第3章では、本研究の中心となる“意義性の俯瞰的把握”のモデルの諸相について述べる。“意義性”とは、概念内容や表現行為が有意義であるという性質、またはその意義そのものである。“意義性の俯瞰的把握”とは、認識可能な各意義性の内容を同時に俯瞰するという意義性の把握の仕方である。意義性の俯瞰的把握は、意義性の主客合一性をそのまま再現する性質・主体自身は主体以外の全てとは一線を画す別格の存在として立ち現れるという別格性・主体が概念内容の利害性に敏感であるという利害志向性、といった基本性質を備えている。

第4章から第7章までは、意義性の俯瞰的把握を以て、日本語の具体的な言語現象についての解釈を行う。この4章は相互に比較的に並行的な位置づけであ

るが、意義性の俯瞰的把握との関連性を参照して、関連性が直接的から間接的という順番で論じていく。

第4章では、意義性の俯瞰的把握を運用し、日本語における話し手の言語化と関わる諸問題についての解釈を行う。意義性の俯瞰的把握の主体は、ある概念内容に言語化に値する意義性があるかどうかを常に計算し続けており、言語化に値する意義性がない場合は言語化しない。また、異なる具体的な状況において異なる意義性を持つ自己を同時に俯瞰している。その結果、言語表現は話し手自身についてのものであることが明白な場合は話し手自身を言語化しない傾向があり、また実際に言語化する場合、状況・身分などに応じて、異なる自称詞を用いることになる。また、意義性の俯瞰的把握の主体は、自己を他者のように俯瞰的に把握し、常に自己の意義性を計算する傾向がある。例えば、自称詞と「この」の共起（e.g.「この俺が負けただど？」）は、意義性の俯瞰的把握の主体が特定の意義性を持つ自己を他者のように俯瞰的に把握した結果、自称詞と「いる」との共起（e.g.「そんな彼を手放したくない私がいる」）は、意義性の俯瞰的把握の主体が公共的意義性と衝突する自己の意識を他者のように俯瞰的に把握した結果、などが挙げられる。

第5章では、意義性の俯瞰的把握の主体の別格性によって動機づけられる言語現象についての分析を行う。意義性の俯瞰的把握の主体の別格性により、主体とそれ以外の全ては、別々のレベルの存在だと認識されることになり、この2つのレベルの対立を際立たせるマーカーが「られる」であり、この意味プロトタイプからの拡張により、自発・可能・受動・尊敬の4つの用法が成立したと思われる。「られる」の意味プロトタイプは、事態が意義性の俯瞰的把握の主体ではなく、主体の外部に発生し、主体による力的作用がないことが際立つ意義性であることをマークすることである。意義性の俯瞰的把握の主体による力的作用がないという意義性により、主体が事態の力的作用によって圧倒される場合と主体の存在自体が捨象される場合に分けられる。他に、別格性と利害志向性を以て、日本語の受動構文・授受構文・状況対処の「を」構文の成立の動機づけもケーススタディとして述べる。

第6章では、特殊な意義性化によって動機づけられる言語現象についての分析を行う。具体的には、意義性の固有概念化表現・客体を意義性の拠り所として把握した表現・「は」によってマークされる主題化という特殊な意義性化などのケーススタディが第6章の分析対象となる。これらのケースは、特殊な意義性化に

よって動機づけられるもしくは関係している点で共通しているが、他の点において接点はない。

第7章では、文体・文末対人モダリティ・発話モードなどを、話し手と聞き手の関係管理と関わる言語形式とし、考察する。独話的発話を例として挙げるが、独話的発話は、全ての意義性の縄張りを可能な限り同等に扱おうとし、意義性の衝突を回避する意義性の俯瞰的把握によって動機づけられた結果、話し手の個人的意義性が他の意義性と衝突する場合、その回避策として独り言のように演出する発話モードである。(1)は一例である。

(1) 教師：ほんとに英語では苦勞します。

学生：えーそうなんですかあ？

教師：ほんと、ほんと。

学生：へえー、先生でもそうなんだあ。

(cf. Hasegawa, 2010 : 158)

下線部は「です・ます」体が必要とされる対話において「だ・る」体の発話となっており、独話的発話である。学生は発話の情報を教師に伝えようとしているのではなく、教師の発話の内容に対して感心している。これは学生の個人的意義性の内容となるが、教師はこの発話の情報を必要としない。故に「です・ます」体で対話的発話を行うことは不当で、独話的発話を行うわけである。発話モードは、各意義性の縄張りを可能な限り同等に扱おうとする意義性の俯瞰的把握の主体が意義性の衝突を回避するための言語装置だと言える。

最後に終章では、本研究の全体的な主張を振り返り、また今後の展望と課題について言及する。